

The Ballad of Reading Gaol にみる無限の苦悩

本間 里美

はじめに

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の『レディング監獄のバラッド』(The Ballad of Reading Gaol, 1898) は、男性同性愛の罪で有罪判決を受けたことによる2年間の強制労働を伴う自身の獄中体験と、妻殺しの罪で死刑宣告をされた元騎兵の囚人チャールズ・トーマス・ウールドリッジ (Charles Thomas Wooldridge, 1866-96) を自身に重ねながら歌ったものである。いくつもの語や構造の繰り返し、円運動を連想させる表現、赤と白の色彩に焦点をあて、これらの表現に反映された作者の終わりなき苦悩や苦痛を明らかにしようと試みた。そして心身を蝕んだ過酷な獄中体験から悲哀を知ったワイルドが「救済」を求める一方で、肉体的な死では終わらない永遠の絶望をいかに表現したのか述べた。

繰り返される苦悩の時間

バラッドの特徴であるリフレインは、日々繰り返される監獄の苦しみを描き出すために適した手法である。“Till like a wheel of turning steel / We felt the minutes crawl” (205) と語られているように、『レディング監獄のバラッド』において苦悩と苦痛に満ちた時間はのろのろと繰り返されながら進む。そして“While some coarse-mouthed Doctor gloats, and notes / Each new and nerve-twitched pose, / Fingering a watch whose little ticks / Are like horrible hammer-blows.” (197) という描写は、刻まれる苦悩は時計のように円の上を進むのみで、そこからの逃亡は不可能であることの暗示である。山中光義はバラッド形式で書かれた Alfred Tennyson (1809-92) の“The Sisters” (1832) に関して、一つの単語のみを次々に変化させたリフレインが事件の経過を表していると言っているが (122)、『レディング監獄のバラッド』では、連の一部を変化させたリフレインによって時の経過を表現するとともに、這うように緩慢に時が進んだとしても終わることのない、苦悩と苦痛の反復を強調している。

第1、2章は昼の空の下、監獄内の運動場で語り手がウールドリッジを眺めて語る場面と、語り手が自身を彼に重ねながら監獄の残酷さや悔恨について語る場面から構成される。第1章から緩慢ながらに時は進むものの、彼らがおも同じ苦しみのなかにいることが第2章第1、2連における第1章第2、3連のリフレインによって示されている。さらに第4章では、死刑執行後、囚人たちが運動場にいる場面において、第1、2章で語られた表現のリフレインによって、時の経過とともに、繰り返され、強められていく囚人たちの苦悩の様子が描かれている。

円運動を連想させる表現

『レディング監獄のバラッド』には、円運動を連想させる表現が数多く登場する。旧約聖書において“*It is he that sitteth vpon the circle of the earth, and the inhabitants thereof are as grasshoppers;*” (Isa. 40: 22) と言われているように、円は永遠の存在である神とともに語られている。このことから「一本の線で描くことができる完全なる幾何学図形である円は、始まりも終わりもない。また円は計ることがなきない...。これらの属性から、円は神のシンボルとされ、計測可能で四つの角によって規定される正方形がこの世の現実を表すのと対照的である。」(フイエ 30)と述べられている。これに対して『レディング監獄のバラッド』のなかでは、円は神の永遠の存在ではなく、終わることのない語り手の苦しみと、後悔の念や罪の意識を表すために使われている。したがってこの円運動を連想させる表現には、語り手の自身を神のように語り聖なる者へと昇華したいという望みと、終わることのない苦しみの両方が反映されている。

語り手の苦悩や苦痛を表す円運動を想起させる表現には“ring”と“reel”のようなものがある。“I walked, with other souls in pain, / Within another ring,” (195) のように、“ring”という語は囚人が運動場で歩かされる時に形成する円をさしている。この“ring”は苦痛のなかにいる語り手とその他の囚人で成り立ち、円が永遠の存在である神を象徴するように、彼らの永遠の苦痛を暗示している。“reel”という語も“Dear Christ! the very prison walls / Suddenly seemed to reel, / And the sky above my head became / Like a casque of scorching steel; . . .” (195) のように、“a casque of scorching steel”という苦痛を表す表現とともに登場し、終わらない苦しみを表している。レディング監獄の運動場の形状は、“They[the gardens] resembled a massive carriage-wheel with 20 spokes radiating from a central hub that housed the ever watchful warder standing on a raised platform who ensured that no communication took place between prisoners.” (Stokes 36-7) と述べられているように円形であった。しかし実際に語り手が運動したのはその円形の運動場が壁で区分された扇形の形状をした一区画ということになる。ここ

で語り手が扇形の壁に“reel”という円運動と関連する語を使用したことは、Bucklerが“To be ‘realised’ in Wilde’s sense meant to be perceived imaginatively . . .” (37) と述べているように、扇形の区画から円形の運動場全体に思いを馳せ、永遠の苦痛を想像していたことを示すものである。

赤と白

繰り返される苦しみや罪の輪を断ち切り、罪や苦しみを知った者として自身を昇華しようという語り手の試みが、赤と白の色彩に関わる表現を用いて歌われている。赤は殺人の際に流された血による罪とキリストの血による許しを、白は許しや救いを象徴している。しかしながら繰り返される赤と白の表現に潜む円構造に注目するとき、語り手が述べるような救いがこの詩のなかに存在するのか疑わしくなってくる。この詩は「罪」→「苦悩」→「救済」という直線的な構造ではなく、実は「罪」→「苦悩」→「救済」→「罪」という円構造で成り立っていると考えられるからである。赤と白の色の表現により、どのように自身の罪を浄化して苦しみや罪の輪を断ち切り、救いへの道を進もうとしたのか、そしてそれがなぜ不可能と言えるのかについて述べた。

赤色のものが詩全体に関わることを示すように、第1章第1連は“He did not wear his scarlet coat, / For blood and wine are red, / And blood and wine were on his hands” (195) と語られることから開始される。Stokesが“... Wooldridge’s regiment, the Royal Horse Guards (or ‘Blues’), wore bluish green coats and not the ‘scarlet’ of Wilde’s opening line — to juxtapose this with blood and wine.” (104) と述べているが、“his scarlet coat”は赤に関する語を並べることで“blood and wine”を強調する役割がある。“blood”はウールドリッジが殺害した妻の血であると考えられるため、罪のしるしとなる。それとともに最後の晩餐で“And he took the cup, and gave thanks and gave it to them, saying, Drink ye all of it: For this is my blood of the Testament, which is shed for many for the remission of sinnes.” (Matthew 26: 27-28) と語られているように、血とワインはキリストと結びつき、罪の許しにも通じている。したがってこの第1章第1連で、罪のしるしである血とキリストの血であるワインに同時に言及することによって、この詩全体を通して、罪人であるウールドリッジ、そして彼に重ね合わせた語り手自身をキリストに模し、聖なるものとして救われようとする願望が語られている。第2章で罪と結びつけられて語られていたワインは、キリストの血や許しをより明確に示すものへと変化していく。そして第5章の最後の2連では、語り手は赤と白を使用して自身が救いへと向かう希望を表現しているように見える。しかしながら救済を表す第5章で終わらなかったことが、この詩が語り手の浄化では終わらなかったことを示している。

おわりに

『レディング監獄のバラッド』は、罪を犯した語り手が、苦悩を経て聖なる者となって救いを得たいという表現に満ちている。「神のシンボル」である円を連想させる構造を使用し、ワインや赤色でキリストの許しを、白色によって語り手の罪の浄化を表そうという試みも見られる。しかしながらそれらの表現は、語り手が苦しみと罪の輪のなかからめとられ、そこから逃げ出すことができないことや、救済では終わらない新たな罪を示すものでもある。結論として「繰り返される苦悩の時間」「円を連想させる表現」「赤と白」という観点から考察すると、『レディング監獄のバラッド』には無限の苦悩のなかで救済を求め続ける語り手の嘆きが表現されているとすることができる。

Work Cited

Buckler, William E. “Oscar Wilde’s ‘Chant de Cygne’: The Ballad of Reading Gaol in Contextual Perspective.” *Victorian Poetry* 28. 3. (1990): 33-41.

Stokes, Anthony. *Pit of Shame: The Real Ballad of Reading Gaol*. London: Waterside Press, 2007. Print.

Wilde, Oscar. *The Ballad of Reading Gaol. The Complete Works of Oscar Wilde: Poems and Poems in Prose*. vols. 1. Eds. Bobby Fong and Karl Beckson. Oxford: Oxford UP, 2000. 195-216. Print.

The Holy Bible: An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.

フイエ、ミシェル『キリスト教シンボル辞典』武藤剛史訳、白水社、2006年。

山中光義『バラッド詩学』音羽書房鶴見書店、2009年。